

保育計画成果報告書

法人名	有限会社 ハーモニー・キッズ
施設名	ハーモニー・キッズ
報告者（役職）	中島 須美江（代表取締役）
住所・連絡先	東京都杉並区高井戸東 2-29-13-101
	☎ 03-6762-9255
	E-mail mom@harmonykids.co.jp

○タイトル（保育計画）

「子どもが育てる子どもの社会性のために・・・」

—— 子どもは遊びの天才だったはず！

「安心して過ごせる環境のために・・・」

○主な助成備品

- ①大型ブロック、平均台
- ②日よけ屋根、ベビーカー

1. 保育計画策定の目的

①「子どもが育てる子どもの社会性のために・・・」

—— 子どもは遊びの天才だったはず！

異年齢の子どもたちが同じ空間で日々すごしている小規模保育園において、年下の子は年上の子に学び、年上の子どもは年下の子を受け入れながらカッコイイお兄さんお姉さんになろうとする。そんな子ども本来の力を子ども自身が引き出し、異年齢が共に遊べる題材を通して子どもの世界のルールを身に着けて行く。

②「安心して過ごせる環境のために・・・」

都市部の住宅密集地において、安全に、心豊かに子どもたちを育てて行く為の環境整備を行っていくと共に、緊急災害時に子どもたちをいかに安全に避難させるかを考える。

2. 具体的な実施内容

①大型ブロック、平均台

大型ブロックは、最初は自由に遊ばせてみた。

⇒ 低年齢の子どもは長いパーツをみつけてまたがって乗り物に見立てたり、小さいパーツをひっくり返して、中に他のおもちゃを入れて持って歩くなど、パーツ自体を使うことをした。

⇒ 年長の子どもが重ねることをしているのを見て高く重ねて倒す事を楽しみ、子どもたち同士が協力してたくさん重ねていた。

⇒ 重ねたまま倒れたブロックの上を、平均台の様に歩くことを楽しんだ。



保育士が、ドアのパーツ、屋根のパーツなど、パーツの意味を見せた。

⇒ 年長の子どもが夢中になって、お家などの意味のある形を作ることに集中する中、年少の子どもが製作途中のパーツを持って行ってしまふ。製作途中の不安定な扉をみんなが通りたがって形を崩してしまうなどのトラブルも発生。保育士が年少の子どもに声掛けをしながら、完成を待つ事もさせた。

⇒ 出来上がったブロックのおうちに、入りたい子、出たくない子でトラブル発生。順番に交代する事を行った。

⇒ 年長の子どもが、保育士に代わって順番を仕切ることを行う様な場面もあった。

⇒ 年長の子どもを中心に、ブロックで囲まれた空間でごっこ遊びが行われ、それに加わって、年長の子どもの指示にニコニコしながら従う年少の子どもの姿もみられた。



平均台は雨の日の室内運動として活用した。

雨で中止になった遠足の日の“遠足ごっこ”にも、橋に見立てて登場させた。

⇒ 最初は長い距離を渡りきることができなかった子どもたちが、段々、長い距離を渡り切る事ができるようになった。

⇒ 保育士が年少の子どもの手を引いている姿を見てか、年長の子どもが年少の子どもの手を引いて、助ける姿が見られた。



⇒ フラフラと不安定に渡る内に、腕を伸ばして広げることによって、安定して歩ける事に気付く子どもがいた。

上に乗って、ジャンプする。

⇒ 最初はジャンプする事ができなかったり、片足でしか降りることができなかったが、次第に両足で着地する事ができる子どもが増えた。

運動遊具として以外の活用

⇒ 乗り物ごっことしてバスに見立て、年長児が運転手になり、後ろにたくさんの子どもが乗って楽しんでた。

⇒ 絵本コーナーに椅子として常設し、お友だちと一緒に並んで座って絵本を見る姿があった。

⇒ ゲーム遊びの中で、安全地帯としての陣地を作る囲みとして利用した。

②日よけ屋根と避難車

テラスからの水遊びスペースに日よけ屋根を設置

⇒ 公道に面しているため、丸見えだった事が治安上、気になっていたが、目隠しをすることができた。

⇒ 水遊び時の日差しを防ぐために、ひよけ帽子をかぶって水遊びを行っていたが、日よけ屋根を設置することにより、帽子をかぶらずに、心行くまで水遊びを楽しむ事ができる様になった。



避難車を使つての避難訓練を実施

⇒ 立ち乗り式の避難車によって、より安全に避難をする訓練を行った。

防災頭巾をかぶつての避難訓練にも回を追う毎に慣れ、上手に立っていられるようになった。



3. その成果と評価

ブロックも平均台も、体を使って遊ぶ事は子どもたちの創造力で色々な遊び方を生み出すという事を実感した。大人の手は最初の呼び水程度で、そこから先は子どもの想像力、創造力を信じて使わせる事によって、良い意味での子どもの世界の力関係を生む題材になったと思う。

日よけ屋根は、都市部での治安を図る意味でも有効なものとなったと区の担当者にもお褒めの言葉をいただいた。通常は収納している状態であるため、高い塀を作るのと違って閉鎖的過ぎる印象にならなかったのも良かった点だと思う。

避難車は通常のお散歩にも活用することもでき、普段からその使用に慣れることによって緊急時の対応もスムーズにできる事と思う。

4. 今後の課題と展望

今回助成いただいた遊具で遊ぶ子どもたちを見る中で、子どもが遊びを生み出すことが出来る遊具の重要性を実感した。兄弟が少ない今だからこそ、保育園の中で、年齢を超えて遊べることの意義を感じ、与える保育ではなく子ども自身の力を信じ、見守って行くことを心掛けたいと改めて思った。今年、年長の子どもに従って遊んでいた年少の子どもが次の年には年下の子どもを上手にリードして、共に遊ぶ事が出来る様になる事を期待したい。

都心部の住宅街で、地域で愛される保育園となるために、閉鎖的にならずに治安を図る事の難しさをどう回避して行くか。関わる大人一人ひとりが十分に考えて行かなければいけない課題だと思う。その為に、地域の一員として、できる事を模索して行きたいと思う。

以上